



早稲田大学大学院文学研究科考古学専攻
課程博士学位請求論文

ウバイド文化における墓制の地域的研究
—土器と墓から見た社会—
(論文概要書)

早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程
考古学専攻退学 (平成8年3月)

小泉 龍人

はじめに

本学位請求論文は、紀元前6千年紀から前5千年紀にかけて西アジアで展開していたウバイド文化における墓制の研究である。西アジアのなかでも、北シリアから北メソポタミア、南メソポタミア、さらには南西イランに至る広大な範囲に展開していたウバイド文化を、墓制の地域的視点から分析・考察していくのが主な狙いである。

ウバイド文化とは、初期農耕にはじまる新石器時代と、本格的な都市文明が出現する初期王朝時代をつなぐ重要なかけはしである。これまで、ウバイド文化の埋葬儀礼に関する考古学的資料が、かなりの時期幅と幅広い分布を示しながら確認されてきている。ウバイド文化の葬制は、複数の河川流域にわたって同質の葬法（墓制）で構成されていると同時に、地域ごとに異なる独自の墓制も併せ持っていた。近年、こうした墓制という文化要素における共通性と地域性が強く認識されるようになり、埋葬儀礼の総合的な比較考察がウバイド期の社会復原に必要となってきた。そこで筆者は、ウバイド墓制における構造、埋葬状態、副葬品などの属性分析により、埋葬儀礼様式の変遷や分布などに主眼を置いた比較研究を試みる。本論は、西アジアにおけるウバイド文化を、墓という考古資料を主に用いながら、地域的文化圏、すなわち地域圏という地理的視座で考察していくことを目的としている。そして、埋葬儀礼から観たウバイド文化の社会構造を独自に解釈し、ウバイド期における社会の複雑化の復原を目指している。

第1章 序 論

まず、ウバイド文化の研究における諸問題を筆者の視点で捉え直し、ウバイド文化の編年、地域の多様性、コンテキストの相違、墓制研究の動向といった問題点について研究史を踏まえながら個別に整理する。とくに、今までのウバイド文化の研究テーマとして、北シリアから北メソポタミアにかけて展開していた北方系統の文化と、南メソポタミアから南西イランに拡がっていた南方系統の文化との相対的比較が、長年にわたって常に意識されてきており、地域性をどう捉えていくのかが大きな問題点となっている。また、ウバイド期の墓地が発掘されても、全体の基数が多いものの個別の詳細な情報に欠けたり、あるいは個別のデータは具体的に記述されているものの全体の基数が少ないといった問題点が常に絡んできている。

つぎに、こうした問題点を考慮した研究の方法を、独自のアイデアを駆使しながら仮説的に提示してみる。ここでは、土器の分類と編年、墓の編年と検証、墓制の比較、地域圏の措定といった、いずれも筆者独自の研究方法を具体的に述べる。とくに、東京大学西アジア先史遺跡調査団が1987-1988年に発掘したテル・カシュカシヨク（Tell Kashkashok）遺跡第Ⅱ号丘の成果は重要な意味を持つ。同調査団は、北方ウバイド期の墓地から計100基以上もの墓を検出し、そのうち64基の墓について個別の詳細なデータを記録した。とりわけ強調されることは、それまで不明であったウバイド期の墓の構造が、現場の精査によりはっきりと確認されたという点である。1988年の調査に参加した筆者は、時間と天候の許す範囲内で、ウバイド期の墓の実測図および写真の記録

を徹底的にとってきた。そこで、カシュカシヨクⅡ号丘の発掘成果を基礎にして、北方ウバイド文化の墓制を比較分析し、南北全体のウバイド文化の社会構造を推論していこうと考えた。

また、本論で筆者が主張している地域圏とは地域的な文化圏のことであり、具体的な遺構・遺物の分布圏と抽象的な総体としての考古学的文化圏をつなぐ作業仮説上の領域概念である。地域圏は、特定の遺物・遺構の分布範囲を示す場合もあれば、複数の遺物・遺構が共存する文化的な広がり表現している場合もある。つまり地域圏は、水系や山系などの地形区分のもとで技術・経済・イデオロギーなどの多様な文化要素が集積して、人文地理的な地域的領域が形成された状態を意味している。それぞれの「圏」内では、山地・台地・低地などにより形成された独特の地形と、降雨・気温による特異な気候環境のもとで、特定「型式」、すなわち特定エンティテイ（時空座標における考古学的資料の類型的なかたまり）としての遺構・遺物が分布し、特有な生業経済活動や交換活動が普及し、特徴的な墓制が展開する。換言すれば、地域圏は自然地理的な地域区分を基礎に、土器製作技術圏、建築様式圏、生業経済圏、交易圏、墓制圏などさまざまな文化要素の重層的な構造を特徴とする。これら文化要素の分布圏の複雑な重なり合いによって、独特の地域、すなわち地域的な文化圏が構成されている。

第2章 地域圏

地域圏の問題点を考慮した研究方法として、本論ではまず最初に、地形区分と生態地理区分による河川流域、山麓域、盆地域、湖岸域などの地理的領域を仮定する。ある特定の地域は他地域との類似性を示すと同時に、固有の特徴も兼ね備えている。地域間の類似性は、相対的比較分析において有効な性質である一方で、独自性は地域圏を確立し、地域的変異を説明するのに役立つ。そこで、特定の水系や山系などに沿ったいくつかの遺跡群から構成される地域圏を措定して、この地域圏を分析作業上の単位としながら地域的文化的独自の発展を考察していく必要がある。まず、地質と地形の概況を紹介し、地域圏設定に向けた地形区分を試みる。つぎに、気候と植生の概況を説明したあとで、生態地理学的な地域区分を行う。そして、地形や生態地理に基づいた自然地理的な地域区分により、ウバイド期の地域圏を仮説的に設定している。よって、ここではユーフラテス河上流域、バリーフ川流域、ハブール川流域、シンジャル山麓域（ワディ・タルタル流域）ティグリス河上流域、ウルミア湖南西岸域、アドハイム川流域、ハムリン盆地域（ディヤラ川流域）、ユーフラテス河下流域、メイメ川流域、スシアナ平原域を措定している。

第3章 カシュカシヨクⅡ号丘のウバイド土器—分類と編年—

カシュカシヨクⅡ号丘の埋葬コンテクストで出土した北方ウバイド期関連の土器群について、容器端部と胴部形状という2つの変数をもとに独自のフォームを形式分類し、各フォームの形態属性を比較分析しながら土器の組列を措定する。まず、アルパチャなどの埋葬コンテクスト内で出土した土器の特定フォームを形態属性に分解しながら、それらの時間軸上の微細な変化傾向を

抽出する。つぎに、他のコンテキストも含めた層位の情報も加味して、該当フォームに関する形態属性群の基準組列を措定する。そして、カシュカシヨク出土土器の同一フォームも形態属性に分解したあと、これらの形態属性群を先の基準組列上に排列しておいた形態属性群と比較する。ここで、カシュカシヨク土器における形態属性間の差異を、基準組列との相対的比較により時間的变化に置換する。さらに、形態属性だけでなく、文様意匠や製作技術などの諸属性も統合しながら、この属性集合体の組列をフォームの時間的变化として捉える。最後に、墓における共伴関係と切り合い関係から、属性組列に依拠した編年操作の有効性を検証する。

ここでは、カシュカシヨク出土の土器について、碗、内彎鉢、半球状鉢、ゴブレット、直線状外向鉢、直線状外向浅鉢、平底浅鉢、有肩壺、丸底球状壺、平底球状壺、折返し口頸壺、鐔状口縁壺、長頸壺、片把手付壺、両把手付壺、乳状突起付壺、蓋受付壺、小形容器の18フォームを設定し、それぞれ形態属性に基づいて組列を措定している。

第4章 ウバイド土器の考察

前章においてそれぞれのフォームに関して措定した組列は器形要素の変遷が主体となっているため、本章では器形以外の製作技術や文様意匠という要素群を加味しながら、カシュカシヨク出土の北方ウバイド土器の編年を構築していく。そして、カシュカシヨクで顕著に現れている器形や他の要素だけではなく、他の遺跡で出土しているウバイド土器の器形や他の要素も同等に扱う。ここでの目的は、まず、カシュカシヨク出土の各土器の組列を他の遺跡から出土している時期指標に有効な土器群と比較検討し、北方ウバイド期の土器様式においてカシュカシヨクで出土した土器群の編年上の位置づけを検証していく。同時に、フォーム以外の諸要素も比較検討しながら、北方ウバイド土器の製作技術に関するさまざまな変遷傾向を探り、カシュカシヨクで出土した土器の相対編年を構築する。そして、この相対編年を、土器の共伴関係と墓の重複関係から検証してみる。さらに、北シリアから北メソポタミアにかけて分布する北方ウバイド土器の器形やさまざまな要素の地域的な変異を読み取りながら、北方ウバイド期の土器系統においてカシュカシヨクで出土したフォーム群を分布上で位置づけてみる。さらに、カシュカシヨク出土土器の機能的な解釈も試みる。

本章の考察により以下の考察結果を得た。まず、カシュカシヨクⅡ号丘の埋葬コンテキストで出土した北方ウバイド期関連の土器群の帰属時期は、前5千年紀前半頃の北方ウバイド前期後半から前4千年紀中頃のポスト・ウバイド後期にかけての幅を示している。各フォームにおいて時間的な断絶はほとんど観察されず、器形、文様意匠、製作技術などの諸要素における変遷は緩やかに進行している。同時に、容器端部と胴部形状という2変数を設定し、それぞれの形態属性の変遷を基準にした相対編年に関して、土器の共伴関係と墓の重複関係の検証によりその有効性を確認できた。つぎに、カシュカシヨク遺跡の立地するハブール川流域は、ティグリス河流域やバリーフ川流域とは明らかに区別することができる。ハブール川流域は、特定のフォームや文様意

匠の存在だけでなく、特徴的な器形や文様意匠の欠落によってその地域性を色濃く表現しており、物質文化が何らかの意味合いのもとで統合される社会的領域が形成されていると推定できた。さらに、埋葬コンテキストにおけるフォーム分類は、実用的な機能分類とある程度相関しており、一見、無味乾燥な形態学的基準に拠ったフォーム分類は、容器の機能的差異をも含んでいたことを確かめられた。

第5章 カシュカシヨクⅡ号丘のウバイド墓—編年と検証—

つぎに、カシュカシヨクⅡ号丘における北方ウバイド期の墓を、墓底面の相対的な位置を指数化するという独自の方法により、墓そのものの時間を軸上に並べ、その組列を副葬品に関する先の土器編年の結果とすり合わせて最終的な墓の編年を構築する。土砂の堆積速度はテルの場所によって当然異なるものの、各場所における堆積速度の相対的比率は一定の割合で進行していったと想定できる。つまり、堆積の速い、遅いの違いが、テルを形成していくが、その際のどれだけ速く、どれだけ遅いかという相対的な関係は、長い年月のあいだではそれほど格差は著しくなかったと仮定している。また、カシュカシヨクにおけるウバイド期の墓群は、なだらかなテルの表面に一定の深さで掘削されたという前提にたち、墓底面は当時の掘り込み面をある程度反映していたと仮定している。ここで、テル堆積および墓底面の仮定を併せて、各墓群はなだらかなテルの表面に一定の深さで掘削されたという仮説を提唱する。テルの表面における緩やかな起伏は、そのまま墓底面の高低に反映されていたと考えられ、墓底面のレベルを比較することにより、ある程度は墓の時間的排列が可能になる。墓が掘削されたときの地表面が、テル全体においてほぼなだらかであったとするならば、近接した時期に一定の深さに掘られた複数の墓の底面も一様ななだらかな面の上に位置することになる。つまり、地山の上に順次堆積していった土層の上面がつねになだらかな地表面を形成しているならば、ほぼ同一時期に形成された墓の掘り込み面レベルの相互関係は、一定の深さで掘削された墓の底面レベルの相互関係にも反映されていたことになる。一定の時期に帰属する複数の掘り込み面の相互関係を、墓底面の相互関係に置き換えて捉え直すのが筆者の意図である。ただ、墓底面レベルの絶対数値を比較しても墓の序列は復原できないので、堆積層中においてどの位の高さに位置しているのかという相対的な数値に換算してそれぞれの墓を比較する必要がある。そこで、墓底面が地山面と一致する場合を0、墓底面が掘り込み面 level 2b と一致する場合を1.0とする基準と比較しながら、墓底面の相対的な位置を指数で表現していく。

本章での成果として、まず墓組列の分析により、全体として北方ウバイド期の墓地の形成過程に関して以下の所見を得た：

- ①墓底面の指数は墓の掘り込み面と強く相関している、
- ②各期の掘り込み面（地表面）はなだらかであった、
- ③土壌堆積および墓地形成のペースは各期を通してほぼ一定し緩やかに進行していった、

④時期の経過と共に墓域がテルの南西斜面から西斜面に移動していった。

よって、各墓群はなだらかなテルの表面に一定の深さで掘削されたという仮説を正当化できた。

また、墓の構造的変遷についても有意な傾向をつかめた。カシュカシヨクでの墓地形成後しばらくして（北方ウバイド後期～終末期）、レンガ列と枕の接面する墓が登場してくるが、枕としての本来の機能はわずかながらも残っている。しかし、後続期（ポスト・ウバイド前期）になると次第に枕という観念的要素が薄れていき、構造上の補強施設として墓室内に袖レンガが本格的に出現していく。観念的表現の枕から構造上の補助施設への変遷は、空地が狭くなったという物理的要因にたえず圧迫されながら、緩やかに進行していったと推理できた。さらに、あとの時期（ポスト・ウバイド後期）になると、袖レンガは墓室の外側に位置するシャフトに設けられるようになり、しかも片袖から両袖へと移行していく。ここで重要な点は、墓室内に片袖レンガが付属していた墓では、袖のある方向と頭位が一致しているという点である。つまり、観念的性格の強い枕が、物理的必要性のもとにレンガ列本体と一体構造となる袖レンガへ変遷したあとでさえも、先行期における頭位規制が残っている。枕としての機能がまったく途絶えてしまっても、頭位を袖レンガ（枕のあった）方向に揃えるという埋葬習慣が継承されている。そして、両袖レンガがシャフト内に設置されるようになると、それまで袖レンガとレンガ列本体が一体化となった墓室空間の機能的構成に変化が生じ、シャフトの積極的な利用が誘導されていく。

第6章 ウバイド期の葬法

前章までのカシュカシヨクⅡ号丘で見つかった北方ウバイド期の墓の編年構築により、北方ウバイド期からポスト・ウバイド期にかけて、カシュカシヨクの墓の構造や副葬品の変遷が体系的に捉えることができた。本章では、カシュカシヨク遺跡で設定された墓編年を基準としながら、北シリアからメソポタミア、イランにかけてのウバイド期全般の墓を、その構造や副葬品について照らし合わせてみる。ここでは、ウバイド期あるいは後続期としての年代が与えられている墓について、葬法を軸にした比較分析を行う。方法的には葬法のなかで考古資料として残りやすい要素、つまり、墓の立地場所、構造、埋葬状態（頭位方向、埋葬姿勢、被葬者数）、副葬品に着眼している。これらの要素に関する諸属性を抽出しながら、筆者が考案した土器のフォーム分類と独自の墓編年の成果を併せて、ウバイド葬法の詳細な比較分析を試みる。

本章では次の分析成果を得ることができた。墓の立地場所について、単一のテル遺跡の場合にはテルの南西～西斜面に、複数のテルから形成される遺跡の場合には、居住域として利用されたテルとは別のテルにおいて、やはり南西～西斜面に墓域が位置している。つぎに、構造に関しては、墓室への入口を塞ぐ、あるいは墓室空間そのものを形成する施設として、レンガ列、レンガ列・袖レンガ、練土列、レンガ囲い、石囲い、練土囲いなどの諸属性がある。また、埋葬状態に関して、埋葬姿勢では屈葬・伸展葬、頭位方向では西・西北あるいは東南方向、被葬者数では単葬・多葬、年齢では成人・小児といった諸属性を抽出できる。さらに、副葬品に関して、特定の

土器フォームが意図的に選択されていることが多く、とくに鉢・壺という器種のセット関係が一般的に共通している。その他の副葬品としてはビーズ類などが一般的である。

第7章 ウバイド墓制の考察

前章において、墓室空間を構成する構造、被葬者数、埋葬姿勢、頭位方向といった埋葬状態、さらには土器をはじめとした副葬品など、さまざまな要素に関する諸属性の分析結果を集成してみると、いくつかの特徴が浮かび上がってくる。本章では、墓の分布状況において観察された傾向を大きく共通点と相違点に分けていき、葬法全般についての情報を加味しながらウバイド墓制（ウバイド期における総合的な葬法）の変遷を考察する。

ここでは以下の考察結果を得た。まず、ウバイド墓制の共通様式として、墓地がある程度決まった場所に造られ、墓の構造には必ずレンガあるいは石が用いられ、成人が埋葬され、鉢と壺の組み合わせが副葬されている。つぎに、ウバイド墓制分布の相違点に関して、大まかな地方差としては、「地下式横穴墓+屈葬」と「平底浅鉢、鐙状口縁壺、釣鐘型ゴブレット、広口型ビーカー」の組み合わせは北方ウバイド文化の墓制を形成し、他方、「箱形堅穴墓+伸展葬」と「浅鉢、注口・把手付容器、カップ型ゴブレット、細口型ビーカー、高坏」の組み合わせが南方ウバイド文化の墓制を形成している。また、河川流域別の地域差としては、北方ウバイド終末期からポスト・ウバイド前期の間に、地下式横穴墓の墓室入口をレンガ列で塞ぐという葬法が、時期的段階をへながらハブール川流域からティグリス河上流水系の西岸域、さらにはティグリス河上流水系の東岸域へ波及していったと推論した。そして、南メソポタミアのユーフラテス河下流域や南西イランのスシアナ平原域では、レンガ囲いの箱形堅穴墓が主に普及しているのに対して、同じ南西イランでもメイメ川水系の上流域（ザグロス山脈南西端）と下流域（デー・ルーラン平原）では、レンガの代用品として板石が墓室の壁材として採用された箱形堅穴墓が展開している。くわえて、河川流域・遺跡内の相違としては、副葬品の土器に描かれている文様意匠、被葬者の頭位方向などで特異な事例が認められる。とくに、カシュカシヨクにおいてブロック土が充填されている墓は、北方ウバイド終末期以降の各期にわたって特定の個人を意図的に埋葬していた墓として推定できた。

つぎに、ウバイド墓制の初現に関して、ハラフ、南西イラン、サマツラといった先行時期の墓制との関連を推察できた。まず、北方ウバイド期の墓制の特徴である「地下式横穴墓+屈葬」は、ケルメズ・デレヤネムリクなどの廃屋墓が起点となり、南方ウバイド期の「レンガ囲い+伸展葬」墓制はガンジ・ダレで見られた葬法が基礎となっている。同時に、サマツラ期の墓制とウバイド期の墓制も関連しているが、地下式横穴墓の祖形、屈葬、赤色顔料、石製容器の副葬、指骨の再埋葬などの点において、サマツラ期の墓制がハラフ期の墓制とほとんどの属性を共有しており、サマツラ期の墓制はむしろハラフ期の墓制の初現に重要な影響を与えている。そして、ウバイド墓制の拡散に関して、南方ウバイド期の墓制のレンガ囲いの箱形堅穴墓が北方ウバイド後期から

ガウラ期初頭までに普及し、そのあと家族葬がガウラ中期頃に拡がっていく。他方、袖レンガを伴う墓も含む、レンガ列構造の墓室に屈葬されるという北方ウバイド期の墓制が、南方ウバイド終末期からウルク前期にかけて南方に浸透していく。やがて、ウバイド期以降の墓制の変遷は収斂化への途を歩んでいく。北シリア・北メソポタミアではニネヴェ5期に、地下式横穴墓のシャフトに土器埋納が特定の人物の墓に対して慣行化され、墓前空間としての利用が発芽していく。同時に、南メソポタミアでは初期王朝時代に、ヴォールトで覆われたレンガ囲いの墓が普及していき、レンガ囲いの箱形堅穴墓の墓室入口が天井から正面に変化していく。つまり、北方系統の地下式横穴墓を母胎とする墓前空間での儀礼と、南方系統の箱形堅穴墓の埋葬伝統に基づくヴォールト架構や追葬風習が融合している。

第8章 ウバイド期の社会構造

前章では、ウバイド期における墓制の地域差が、地域的な「ウバイド」文化の空間的な領域を示すことが確認され、同時に、時間的変遷のもとにその分布圏が微妙に変化する様相も窺えた。ウバイド墓制の動態に関するこうした考察成果は、一歩進んで社会そのものを復原していくうえで重要な足場を提供してくれる。本章では、墓制から読み取れる地域的変異および時間的変遷をもとに、その文化要素の集合体である社会を論考していく作業へと入る。つまり、墓制に関連したさまざまな文化要素を個別に検証しながら、ウバイド社会の重層的な構造を探っていく。前半では、いままでの分析・考察で得られた、時間差と地域差を内包するウバイド墓制の動態をもとに、その背景にある社会的な構造を考察する。後半では、土器製作技術、建築様式、生業経済、交易といった文化要素の分布傾向を推考していき、墓制圏との比較検証を試みる。

本章の考察では以下のような結果を得られた。ウバイド期の墓制においては、本格的な墓地の形成や葬制の画一化といった社会規範による影響が窺え、成人と小児の埋葬方法の差が顕著になるなど、両者の社会的な役割が分化している。ウバイド期において広く普及している独特な埋葬儀礼は協業体制のもとで執り行われ、共同体の多くの構成員を巻き込むことになる埋葬儀礼は、社会的な求心力として大きな役割を果たしている。ウバイド期の社会構造は、社会的格差のほとんど目立たない極めて平等的な性格を帯び、社会組織的には血縁関係からなる家族集団が世帯・就労の単位となっている。軍事力を背景にした政治的支配は窺えず、むしろ祭祀ネットワークが社会の維持・統括装置として機能している。具体的には、ハブール川流域などで目のシンボルに代表される表徴文様が埋葬コンテキストで盛んに採用され、ウバイド社会のイデオロギー的なまとまりを示している。他方、ユーフラテス河下流域やスシアナ平原域では蛇を祀った祭祀が慣行化されており、具体的な祭具あるいは儀器として、蛇文の装飾された土器や蛇形土製品が用いられている。地域的に慣行化されていた埋葬における儀礼体系や神殿での祭儀体系などから成る祭祀ネットワークが、ウバイド期における地域圏の求心力として機能している。この祭祀ネットワークの運営において指導的役割を果たしていたのが各地域圏における神殿であり、余剰食糧を貯蔵・

管理し、おもに地域間における物資の交換を目的にした交換財としての運用も担いはじめる。

ウバイド終末期になると、墓の構造や副葬品において緩やかに格差がついていき、社会的役割の違いが次第に社会的地位の分化に結びつくようになる。今まで未分化で事足りていた身分が少しずつ序列化されていき、集団統合や行政運営といったさまざまな社会的需要に呼応しながら社会階層が形成されていく。そこでは、意志決定が特定の指導者に一任されるような首長制社会へと変化していく。実際の指導体制は祭祀を取り仕切る司祭が担っており、司祭を首長とする階層化された社会のなかで高い社会的地位についていた集団が、親族集団を核とするリニッジや氏族に対して、生産食糧の供出や公共事業への協働参加の見返りとして、祭祀の実演によるイデオロギー的な安心感や精神的連帯感を与え、生活改善や環境整備という行政サービスを提供していく。また、役割や地位の世襲的な受け渡しが未熟な段階であり、ウバイド終末期は司祭を中心にした財の再分配が行われつつも、社会的地位の世襲が本格的に行われていない首長制社会といえる。そして、出自の異なる血族集団が交じり合うようになり、複雑な系統の集団を束ねるために社会組織の制度化が促進され、親族集団の協業形態が解体しながら、非血縁的な社会関係も許容した地縁的な分業体制へと緩やかに移行していく。よって、ウバイド終末期には社会が一段と複雑化していき、財産の継承、個人的所有権の認知、余剰財による専門工人の扶養などが本格的に現れ、やがて、複雑な社会を運営する目的で行政・軍事・祭祀などの執行単位が分立していく。

ポスト・ウバイド＝ガウラ＝ウルク期初頭になると、ウバイド終末期に端を発した集団内における社会的地位の分化が一層進行していき、ポスト・ウバイド＝ガウラ＝ウルク期後半になると、さらに社会的格差が明瞭になってくる。社会的地位が世襲制によって生まれつき保証されている首長制社会がポスト・ウバイド＝ガウラ＝ウルク期後半には整備される。そこでは、司祭に代わって世俗的な首長が出現し、複雑な社会を効率的に運営する目的で行政・軍事・祭祀が本格的に分立していく。北シリアや北メソポタミアにおけるポスト・ウバイド＝ガウラ社会では、天水農耕を軸とする生産体制を基盤として極めて個性的な首長に導かれた首長制社会が進展していく。他方、南メソポタミアのウルク社会では、灌漑農耕を核とする生産体制に立脚した中央集権的な社会が出現しつつある。ウルク期になると肥大していく社会余剰を運用する機構が複雑化し、政治的な支配の必要性により祭祀を基調としたイデオロギー的な紐帯構造に変化が生じる。つまり、ウルク期になると祭祀によるつながりが崩れ、祭祀ネットワークが交易ネットワークへと変質し、経済を基盤とした政治的支配が確立されると推論できた。

さらに、前3千年紀初頭になると、共同体において社会的地位の高い人物（成人あるいは小児）が地下式横穴墓などの特殊な構造の墓に埋葬されるようになり、しかも、共同体の構成員から尊敬・崇拜される人物（とくに成人）が死後に祭祀の対象となっていくと推考できた。そこでは、単なる世俗的な個人指導者に留まらず、周囲から畏敬の念をもたれていた王的存在を予見した。これは、先のウバイドおよび後続期社会とは異質の社会組織体制の出現を想起することができ、首長制社会から中央集権的な社会に向けた移行期として位置づけることができる。

第9章 結論

本論では、ウバイド文化における土器と墓を比較分析しながら、文化要素の地域性や社会構造の実態を考察してきた。さいごに、いままで筆者が分析・考察してきた土器分布、墓制分布、地域圏、社会構造の複雑化について整理しておく。

一般的なウバイド土器は、粘土紐が輪積みされたあとで成形の最終段階として回転台が併用され、均整のとれた容器に仕上げられている。そして、ケズリやナデを主体とする器面調整や、ときには彩文などの装飾が施され、高温で焼成される。この特徴的な土器製作技術は、ユーフラテス河上流、バリーフ川、ハブール川、シンジャール山麓（ワディ・タルタル）、ティグリス河上流、ハムリン盆地（ディヤラ川）、ユーフラテス河下流などの各地域において共通している。とくに、前5千年紀後半の北方ウバイド後期あるいは南方ウバイド4期には、ほぼ同様な技法のもとで類似したフォームの土器が各地で製作され、その生産様式は規格化された反復生産といえる。その生産体制の背景には、土器製作という役割が社会的に評価されていたウバイド期の社会構造を推定できた。とくに、器形に関して土器は複数の水系におよぶ共通の属性と、水系単位の個性豊かな属性とを重層的に内包している。土器の製作技術は、ウバイド社会の画一的な土器生産体制に影響される一方、土器のフォームや文様意匠は地域性の強い自律的な組織体制を反映している。ウバイド終末期頃になると、土器の製作技術は簡略化されていき、社会的役割として一定の評価を受けていた土器製作への関心が相対的に低下して、その代わりに他の活動に社会余剰が投入されていく。土器製作技術の合理化は、コスト削減や効率性の追及といった点で、ウルク後期以降に位置づけられる土器の大量生産の土壌を形成していく。

また、ウバイド墓制に関しては「地下式横穴墓+屈葬」に代表される北方ウバイド文化の墓制と「箱形竖穴墓+伸展葬」に代表される南方ウバイド文化の墓制に大別できる。とくに、北方ウバイド文化の墓制は竖穴（地下式）円形住居が掘られた丘陵の文化を、一方、南方ウバイド文化の墓制は地上式矩形住居が建てられた低地の文化をそれぞれ基礎としている。さらに、河川流域、山麓域、盆地域などの地域圏に基づいて墓制の拡散そのものを文化の動態として捉えることができ、それぞれの地域的なウバイド文化、つまり「ウバイド文化」の設定に向けて重要な見通しを得ることができた。北シリアから北メソポタミア、南西イランまでの広大な空間のなかで時期差と地域差を有するウバイド文化の墓制は、時空座標上で有意な指標となり、他の文化要素の出現に関する時期差や分布傾向を探っていく上でも極めて有効な基準となる。そして、ウバイド期にはじまった墓制の伝統は、以降の埋葬儀礼が体系化されていく過程において重層的な骨格を形成しており、まさに古代西アジアにおける墓制の初現として位置づけることができた。

さらに、本論では、地形・生態地理に基づいた自然地理的な地域区分により、ウバイド期の地域圏を指定し、その仮説的な地域圏を単位としてさまざまな文化要素の動態を考察してきた。本論で得られた地域圏に関する有意な成果のいくつかを以下に列挙する。まず、ユーフラテス河上流域は、南方ウバイド3期の文化の拡散に強く影響されながら、水系を軸とした南北方向の連帯

を基礎とする地域圏を形成している。また、ハブール川流域は、西方のバリーフ川流域と関連しつつも、東方のシンジャル山麓域やティグリス河上流域とより密接なつながりを北方ウバイド期全般において維持していた地域圏である。つぎに、ティグリス河上流の西岸域は、北方ウバイド期においてはシンジャル山麓域とともに西方・東方のいずれにも密接につながり、後続期になるとシンジャル山麓域よりもむしろティグリス河上流の東岸域との連帯が強くなる地域圏を形成している。一方、ティグリス河上流の東岸域は、北方ウバイド期においてティグリス水系を幹線にして南方ウバイド文化と密接に関連しているだけでなく、西方の諸地域とも連携していたが、やがて後続期になると南方ウルク文化に対抗した独自のガウラ文化を西岸域と共に主導的に形成していった地域圏である。そして、南北メソポタミアの中間地帯に位置するハムリン盆地は、ザグロス山麓に沿った南北方向の回廊的なつながりが、徐々にディヤラ水系を幹線にした東西（北東-南西）方向の連携へと変化していく地域圏を形成している。さらに、ユーフラテス河下流域はスシアナ平原域とほぼ同質の地域圏である。くわえて、メイメ川流域は、山地と低地という地形的環境の相違だけでなく、天水農耕地帯と半沙漠ステップ地帯という生態地理的環境の違いを乗り越えた、メイメ水系を軸にする均質な地域圏として展開している。

ウバイド期の社会の複雑化に関して、ウバイド期の社会構造は、社会的格差のほとんど目立たない極めて平等的な性格を帯び、社会組織的には血縁関係からなる家族集団が基礎となっている。本格的な墓地の形成、レンガあるいは石の構造、副葬品としての土器フォームと文様意匠の組み合わせなどが、画一化された埋葬儀礼様式の指標となっている。ここでは、目のシンボルや蛇に関わる祭祀ネットワークが社会の維持・統括装置として機能している。そして、ウバイド終末期以降には、威信材を伴う墓や、規格の際立つ構造など、さまざまな葬法上の点で、先行期のウバイド墓制とは異質の兆しが萌芽してくる。社会的役割の違いが次第に社会的地位の分化に結びつくようになり、徐々に社会階層が形成されていく。その指導体制は祭祀を取り仕切る司祭が担っており、ここでは、世襲的な役割や地位の受け渡しが未熟な段階の首長制社会が展開している。そして、出自の異なる血族集団が交じり合うようになり、複雑な系譜の集団を束ねるために社会組織の制度化が促進され、親族集団の協業形態が解体しながら社会的分業体制へと緩やかに移行していく。こうしてウバイド終末期には社会が一段と複雑化していき、複雑な社会を運営する目的で行政・軍事・祭祀などの執行単位が分立していく。やがて、ポスト・ウバイド=ガウラ=ウルク期初頭になると集団内における社会的地位の分化が一層進行し、ポスト・ウバイド=ガウラ=ウルク期後半になるとさらに社会的格差が明瞭になり、社会的地位が世襲制によって生まれつき保証される首長制社会が整備されてくる。ここでは、司祭に代わる世俗的な首長が現れ、行政・軍事・祭祀にわたって支配権を行使できる個人指導者が台頭していく。しだいに、祭祀によるつながりが経済に基盤をおいた政治的支配に置換され、複数の水系をまたぐ交易ネットワークが普及していく。前4千年紀後半になると、ウバイド期の祭祀ネットワークの基盤に立脚しながら、交易ネットワークのもとに世俗的な個人指導者が社会を政治的に支配するようになる。